第一の特色は会衆が泣くことである。会衆は二人の社会的地位が変化した事を認め、その事が会衆に社会連帯の絆を確認させる。そこで彼等会衆に社会への愛着心がたかまり、涕泣するのである。

第二の特色は新郎新婦が会衆の面前で抱擁し泣くことである。彼等もまた新たな社会結合を確認し、そのことが彼らの社会への愛着心を刺戟して泣くのである。

アンダマン島民は友人と再会したとき、成年式のとき、敵対関係にあったローカル・グループが和解しあうとき、同様に泣きあう。従ってこの場合の涕泣という行為は悲しみの表現ではない。社会的に形成された愛着心の表現なのである。泣くことによって、成員の心の中にある抑圧された攻撃感情（欲求不満から生ずる）のはけ口ともなっているであろう。式の最後のダンスや涕泣は愛着心の表現として、島民に義務づけられた慣行である。こうした表現が結婚式という集団儀礼に於て繰り返され、集団の凝集性が維持されるのである。

ラドクリフ・ブラウンの作業仮説の内容に新味はないにしても、その仮説に従がって、アンダマン島民の結婚式に於ける「涕泣」の慣習のもつ機能を解明する事に成功している。誰がアンダマン島民の中に入っていっても涕泣が特殊な行為である事に気付くであろう。ラドクリフ・ブラウンより三十年前にアンダマン島民を調査したマンの記録にも、それは指摘されている。にもかゝわらず、マンはその行為の特殊性以上の説明を行なっていない。

儀礼解釈の仮説に続いてラドクリフ・ブラウンは「社会生活に影響を及ぼす事物は社会的価値を有する」と云い、次に社会的価値の概念を導入する。社会生活に好ましい影響を及ぼすものはプラスの社会的価値、社会生活を脅やかすものはマイナスの社会的価値を有する、と彼は云う。ラドクリフ・ブラウンは、更に「社会的価値」の概念から「社会的人格」という概念を考える。個人も社会に働きかける存在であるから、個人も社会的価値を有する。個人の社会

的価値をきめるものは、個人の知能、技術、道徳性、情緒の安定性など、則わち社会的人格であると云うのである(Radcliffe-Brown,1922:295)。そもそもパーソナリティは社会関係に於ける個人の行動型式の総体を意味する概念であるから、人格に社会という接頭語を付すのは蛇足である。名称はさておき、ラドクリフ・ブラウンはこれにより社会構造に於ける成員のヒエラルキーを示すものとした。このことは、後の社会人類学に於ける「地位と役割」理論の端緒を開いたものとして注目すべきである。リントンが初めて「地位と役割」の概念をうちだしたのは、ラドクリフ・ブラウンに遅れること十四年である(Linton, 1936:113—114)。一九五二年に至り、ラドクリフ・ブラウンも「社会的人格」に代えて「地位と役割」の概念を用いるようになった(Radcliffe-Brown,1952:11)。

何故、アンダマン島民は、成年式、結婚式、葬式などの通過儀礼を催おすのか、という疑問にそなえて、ラドクリフ・ブラウンは「社会的人格」の概念を考えたと思われる。彼は「アンダマン島民」の二九六頁に於て葬式を次のように説明するからである。

死は社会的人格の最も根本的な変化である。死は社会的人格の破滅を意味するのではない。死者はアンダマン島民の記憶の中で生きている。唯それが数ケ月後の洗骨で骨が共同体の財産とされ、新たな社会的価値をもつようになるため、社会的人格が変化するに過ぎないのである。

このように共同体成員に急激な社会的人格の変化があるときに、集団儀礼は行われるのである。集団成員の急激な社会的人格の変化は、共同体秩序の変化を意味するから、集団で新たに共同体秩序の維持を確認するわけである。しかも社会的人格のシンボルは各人の名前であるから社会的人格の変化があるとき、名前はタブーとされる。

通過儀礼の果す機能及び通過儀礼の必然性についてのラドクリフ・ブラウンの分析は適切であると思う。唯、奇異に感ぜられるのは、超人間存在（ビリクや精霊）とアンダマン島民との間の定型的行為はそれらの儀礼に見られないのに、それらが宗教的制度に含められていることである。また、彼は何故名前や、食物が通過儀礼の際にタブーとされるかについて明らかにしない。「儀礼的価値をもつものは儀礼の対象となる。」「タブー（禁忌）の対象となるものは儀礼的価値をもつ」（Radcliffe-Brown,1922:139）と循環論法を出しているが、結局、特に重要な社会的価値をもつ事物は、集団儀礼の際に、その社会的価値を再確認させて、共同体社会の秩序維持に役立てられるということであろうか。ラドクリフ・ブラウンの儀礼解釈の弱点は、アンダマン島民の間では集団儀礼よりも個人儀礼（呪術）が一般的であると指摘しながら、呪術的行為については事実を列挙するだけで終始している事である。

三、信仰の解釈

アンダマン島民の信仰を解釈するに当ってラドクリフ・ブラウンは原始宗教のもつ普遍的な特色である「霊魂（精霊）の二重性（ambivalence）」について一つの理論を、宇宙観「（神話）」について二つの法則を、また「霊力」について一つの理論を準備している。こゝに云う理論とか法則の用語はラドクリフ・ブラウンに従ったまでの事で、彼自身「仮説」「法則」「理論」を厳密に差別せず、彼の主観的判断でニュアンスに差をもたせているだけである。

1　霊魂（精霊）の二重性

アンダマン島民の霊魂にたいする態度は矛盾している。生きている人間に幸福をもたらすのは霊魂であり、病気や死などの災厄をもたらすのも霊魂であると信じている。霊魂に対しては、愛着と恐怖の矛盾した態度をとる。アンダマン島民自身はこれを矛盾だとは考えていないのであるが、霊界との間に友好と敵意の矛盾した関係に立つのは、未開社会の信仰の一般的特色である。ラドクリフ・ブラウンはこれを次のように分析する（Radcliffe-Brown,1922:299—308）。

共同体成員が相互に抱く愛着心は死者にも及ぼされる。それ故に死者の骨に社会的価値が付与される。また死によって共同体の成員を失うことは社会連帯への直接の打撃であるから、成員が失なわれたことに対し、共同体は怒りを示す。ひるがえって、アンダマン島民の集団的対立はローカル・グループ（共同体）相互の対立でである。このローカル・グループの対立という事実が、死に対する怒りの感情を媒介として、霊界に対しても反映され、他のローカル・グループに対立するように霊界と敵対関係に入る。集団の凝集性は対立関係が存在するときに増大するから、霊界と敵対関係に立つ事は、アンダマン島民の共同体の凝集性を強める役割をはたしている。

ラドクリフ・ブラウンは集団の凝集性についての、サムナーの「内集団と外集団の理論」（Sumner,1906:12—15）を用いて（ラドクリフ・ブラウンは引用文献を示さないが…）、霊界との対立関係の機能を考えた。未開民族の社会で、霊魂のはたす社会的機能をこれほど明快に分析したのは、ラドクリフ・ブラウンがはじめてである。シュピロが後にこの分析にならって、カロリン群島にあるイファルク島の、マイクロネシア人の共同体で、アルセンガウ（邪悪

な霊魂）に、彼等のコントロールできない台風や病気の原因を帰せしめ、アルセンガウを彼等の欲求不満の代償物としている事実を明らかにしている（Spiro,1952:497−503）。

2　宇宙観（神話）

アンダマン島民の考える最高神がビリクであることは七−八頁で紹介した。ビリクは島民の最も惧れる台風をひきおこすとされるが、それは島民が蜜臘を溶かしたり焼いたり、蟬を殺したり、乾季にヤムを採集したりする事でビリクの怒りを買うからだと説明される。これに対するラドクリフ・ブラウンの解釈は次の通りである。

乾季も終りの四月になると、蜂蜜の収獲が次第に減り、島民は蜂の巣をとり蜜臘を溶かす。此頃は季節風の代りめで海は荒れ嵐が吹く。つまり蜜臘を溶かす頃に嵐がやってくる事実から島民は蜜臘とビリクを結びつけるのである。アンダマン島で蟬が鳴くのは十月から十一月にかけてである。この時期はモンスーンから北東季節風への代りめであり、台風の吹きすさぶ時期である。だから蟬とビリクを結びつけたのである。乾季にヤムを取ればモンスーンの時期にヤムは増えない。結局台風とヤムの減収はマイナスの社会的価値をもつ。とすれば、アンダマン島民のビリク観は自然現象に対する社会的価値の表象である。

アンダマン島民の宇宙観をこのように分析したのちに、ラドクリフ、ブラウンは、未開社会の宇宙観すべてに適用できると考えた二つの法則を提示する（Radcliffe-Brown,1922:356−57）。

第一法則

社会に災厄をもたらす自然現象にマイナスの社会的価値が付与される。

第二法則

擬人化された自然現象は、人間と同様に、理由なくして怒らない。

自然科学的な法則の確立をめざすラドクリフ・ブラウンは至極まじめに書いているのであろうが、この程度の常識を法則にしたてるのは矢張り滑稽である。第二法則は、擬人化という事を二度繰返して云っているのと同じことである。そのような「法則」を提議するよりは、むしろ、「自然現象の擬人化は、自然を人間社会であるかのように考えさせ、自然が我々の考えるような自然法則にではなく、人間社会の道徳律によって支配されていると考えさせる効果を有する。自然をも共同体秩序の中に組み入れてしまう」という、一般的記述がはるかに好ましい。

3 霊　力

アンダマン島民は、社会生活の過程で幾度となく「偉大な力」の存在を感ずると、ラドクリフ・ブラウンは想定する（Radcliffe-Brown,1922:384—385）。

> アンダマン島民は、絶えず彼等の行動を拘束する力を、それに従わなければ罰されるというような、そのような力を感ずるに違いない。自己の他人に対する行動が正しいか間違っているかというときに感ずるであろうし、ダンスのときにも、また社会的価値を有する対象を通しても感ずるであろう。また、アンダマン島民は、火、人間の骨、赤い粘土などにも超人間的な力を感じている。

事物に流れている超人間的な力は、一般に「マナ」（mana）の観念で知られている（Codrington,1891）。メラネシア、ポリネシアの原住民の間で「マナ」、北米インディアンのスウ族で「ワカンダ」、イロクオイ族で「オレンダ」、アルゴンキン族で「マニトウ」、アフリカのベルギー領コンゴのンクンド族で「エリマ」などの名称で知ら

れる、きわめて普通的な観念である。このマナに似た日本人の観念は、物のタマシイというときの「タマシイ」であるし、沖縄地方に限って云えば、セヂ高さんというときの「セヂ」（Siji）である（仲原、一九四七、一二五―一五一頁）。アンダマン島民は、しかし、この「マナ」に相当する言葉をもっていない。すなわち、彼らは、「力の存在」を熟知しているけれども、まだそれに特別な名称を与えて概念化するに至っていないのである。ラドクリフ・ブラウンは「アンダマン島民が、火・人骨などに災厄を除く力を感ずるようになったのは、共同体に於て道徳的強制力を現実に経験していたからである」（Radcliffe-Brown,1922:404）と推定する。先ず社会の道徳的強制力の観念があって、それから二次的に、「ビリク」の台風をひきおこす力や、特殊の事物にある呪術的力の観念が派生したというのである。これはフレーザーの「呪術が宗教の先行形態である」（Frazer, 1933―36）とする呪術理論や、タイラーのアニミズムの理論とも相入れない。

ラドクリフ・ブラウンは、「アンダマン島民」の最後の四〇五頁で、「その著書のテーマはアンダマン島民の宗教の性格とその機能を説明する事」であった告白しながら、それまでは一度も宗教の定義を示さず、それのみか「宗教」という言葉すら一度も使用していない。理由は何かと云えば、宗教の定義を下すことは甚しく困難であり、大方に承認されるような定義も存在しないからであると述べる。確に宗教の本質について、呪術は宗教と区別できるか、宗教の中にまとめるべきか（Titiev）、呪術と区別するとすれば社会的拘束性の有無に求めるべきか（Durkheim）、呪術を擬似科学とみなして区別するか（Frazer）、それとも実用的な直接的な目的を有する儀礼を呪術とすべきか（Malinowski）などの問題があり、信仰が第一義的なものかそれとも儀礼かという疑問もついてまわる。そこでラドクリフ・ブラウンは、「宗教は、偉大な道徳的な力及び人格或いは非人格的力への信仰と、人間とそれらの偉大な力との間の組織だてられた関係より成立つ」という定義があるが、この定義を認めるとすれば、そのような信仰と儀礼

はアンダマン島民に見られるから、アンダマン島民には明らかに宗教があると、述べて稿を閉ぢている。

VI 結び

ラドクリフ・ブラウンが「アンダマン島民」の最後の頁で示した定義から見てとれる宗教的要素は、「道徳的力・人格的力・非人格的力への信仰」とそれに伴なう「儀礼及び観念」の二つである。「道徳的力への信仰」が宗教の本質である事を最初に主張したのはデュルケムである（Durkheim, 1915）。デュルケムはトーテミズムを最も原始的な宗教とみなし、トーテミズムでは、定期的集団儀礼が集団の存在を成員に確認させ、集団凝集性を強化している機能に着目し、集団の象徴であるトーテムを崇拝することは、結局集団そのものを崇拝する事を意味すると考えた。そこから彼は、「宗教は集団表象であり、神は社会そのものである」という有名な命題をひき出したのである。デュルケムのこの命題を大前提にして、ラドクリフ・ブラウンはアンダマン島民の解釈を進めたと思われる。だから、彼は一見非宗教的なアンダマン島民の通過儀礼をアプリオリに宗教的儀礼とみなしたのである。唯デュルケムと異なる点は、ラドクリフ・ブラウンの場合、呪術をも宗教の中に含めている事である。デュルケムは、呪術は個人に関するものであるとして社会的拘束性を有する宗教から区別した。ラドクリフ・ブラウンのように「機能」の概念を作業仮説として社会諸制度を考察するならば、それらがすべて集団維持に貢献しているという目的論的解釈に捉われてしまうおそれもある。「アンダマン島民の宗教」についてのラドクリフ・ブラウンの解釈は、次のように要約することができる。

> 宗教も社会制度として社会維持の機能を有する。その機能は集団儀礼に於て強化される。集団儀礼に於ける涕泣という慣習を通して社会連帯感が意識される。と同時に社会の力（道徳的強制力）が意識される。この集団の力を意識することが宗教の本質である。この力は自然現象にプロジェクトされて、「ビリクと精霊」のもつ力の観念となる。つまり超自然的存在の観念である。また更に特定の事物にプロジェクトされて集団維持に貢献する「災厄を除く力」の観念となる。それらの「力」の観念が一体となり、社会体制の維持に貢献している。

ラドクリフ・ブラウンは「アンダマン島民」の巻頭で、未開民族のあらゆる様相をそれらの相互関聯の中で集中的

に調査するのが人類学者の基本的姿勢であらねばならないと説き、原始宗教研究法の一つのモデルを示すことができた。二十世紀初めまでの、単なる文化要素（特性）の記録、比較から、制度の理論的研究を開始した業績は大きい。エヴアンス・プリチャードは、「ラドクリフ・ブラウンやマリノウスキーらの機能主義人類学の出現により、社会人類学と民族誌は初めて分離された」（Evans-Pritchard,1951:56）とまで云いきっている。ラドクリフ・ブラウンは、「機能」「社会的人格」「社会的価値」「儀礼的禁忌」「社会構造」「社会組織」などの概念を次から次へ構成していった。それらの概念の多くは本来彼の創意によるものではないけれども、それらの概念に新たな内容を加えて人類学的概念とした所に意義を認めることができる。特に霊界の果す機能についての彼の卓見は、シユピロを含めて多くの原始宗教研究者に社会心理学的アプローチを開拓させる端緒を開いた。

ラドクリフ・ブラウンのように、機能主義的研究法によって確に一つ一つの社会を統合された全体（Integrated whole）として分析する事は可能である。つまり社会静態学的ないき方である。その上、彼は自然科学的な法則を社会学にも予定し、未開社会にひろく適用できる法則の発見につとめた。「若しも文化の機能に関する諸法則を明らかにしてくれるなら、こんな嬉しいことはない！」（Lowie,1937:227）。ラドクリフ・ブラウンが「法則」という言葉を濫用し、例えば「擬人化された自然現象は、人間と同様に、理由なしに怒らない」という常識的法則を述べるとき、これを法則としてどれほど未開種族の宇宙観解明に役立てることが出きるだろうか。彼が儀礼解釈の仮説として述べている項目にはトートロジー（tautology）やルーズな言葉使いも多い。しかしこの程度のことは、「如何なる問題も作業仮説なくしては解決の緒口をつかめない」、ということで、擁護されよう。問題意識以前の、慣行の単なる記述よりは、それでも、はるかに優るからである。

引用文献

Cipriani, L. 1958 How to Save the Natives of Little Andaman from Extinction. Anthropos. 53: 1028

Codrington, R.H. 1891 The Melanesians : Studies in their Anthropology and Folklore. Oxford, Clarendon Press

Durkheim, Emil 1915 The Elementary Forms of the Religious Life: A Study in the Religious Sociology. trans. Swain. London, George Allen & Unwin.

Eggan, Fred. ed, 1937 Social Anthropology of North American Tribes. University of Chicago Press.

Evans-Pritchard, E.E. 1951 Social Anthropology. London, Cohen of West.

Firth, Raymond 1951 Contemporary British Anthropology. American Anthroplogist 53:474—489

Frazer, J. G. 1933—35 The Golden Bough: A Study in Comparative Religion, 3vols. London, Macmillan & Co.

Linton, Ralph 1936 The Study of Man: An Introduction. New York, D. Appleton-Century.

Lowie, Robert 1937 The History of Ethnological Theory. New York, Holt, Rinehart & Winston.

Man, Edward Horace 1885 On the Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands. Journal of the Royal Anthropological Institute (1952)

Murdock, G.P. 1951 British Anthropology. American Anthropologist 53:465—473

仲原善忠 1947 「セヂ（霊力）の信仰について」・沖縄文化業説（柳田国男編、中央公論社）所収

Radcliffe-Brown, A.R. 1922 The Andaman Islanders. Cambridge University Press.

……1931 The Present Position of Anthropological Studies.

British Association for the Advancement of Science, Section H.

……1935 On the Concept of Function in Social Science. American Anthropologist 37:394—402

……1952 Structure and Function in Primitive Society:Essays and Address. London, Cohen & West.

Spiro, Melford E・1952 Ghost, Ifaluk, and Teleological Functionalism. American Anthropologist 54:497—503

Sumner, W. Graham 1906 Folkways. Boston, Ginn & Co.

Tylor, E.B. 1871 Primitive Culture. 2 vols. London, John Murray.

Titiev, Mischa 1960 A Fresh Approach to the Problem of Magic and Religion. Southwestern Journal of Anthropology. 16:292—298.